

# J.S. バッハ作曲「二声インヴェンション」の楽曲分析と演奏解釈

第13番 イ短調 BWV 784

藤 本 逸 子

## はじめに

この小論に先立ち、「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』<sup>1)</sup>」の楽曲分析と演奏解釈<sup>2)</sup>と題し、「第1番 八長調 BWV<sup>3)</sup> 772」から、「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から、「同第12号」の各号にそれぞれ、楽曲分析し、演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」に、同じく楽曲分析し、演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたつて、「第13番 イ短調 BWV 784」を、取り上げたものである。

## 楽曲分析と演奏解釈

「W.F. バッハのための小曲集<sup>4)</sup>」(以下「Kb. für W.F.B.」)において、この「Inventio 13」にあたるのは、37番めの曲で、「Praeambulum 6」(BWV 784)と題されている。両者には、表のような違いがみられる。大きな違いは、「Praeambulum 6」は、21小節で曲が成り立っているが、「Inventio 13」は、25小節できている。「Praeambulum 6」の16小節から18小節に当たるところが、「Inventio 13」では16小節から22小節と延長して変化している。

表 「Inventio 13」と「Praeambulum 6」の相違箇所

Inventio 13		Praeambulum 6	
<u>12</u> <sup>5)</sup> 下声2拍め	G音 <sup>6)</sup> H音 D音 Fis音	<u>12</u> 下声2拍め	G音 H音 Dis音 Fis音
<u>16</u> 両声1拍めから	大きな違い(譜2) <sup>7)</sup>	<u>16</u> 両声1拍めから	大きな違い(譜1) <sup>8)</sup>
<u>22</u> 両声1拍めまで	大きな違い(譜2)	<u>18</u> 両声1拍めまで	大きな違い(譜1)
<u>22</u> 両声2拍めから	違いなし	<u>18</u> 両声2拍めから	違いなし

1) 「二声インヴェンション」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年(以下「第2号における小論」)の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。

3) BWV = Bach-Werke-Vergleichnis, W. シュミダーによるJ.S. バッハ作品総目録番号。

4) 「W.F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例、第4小節め 4、第3小節めから第10小節め 3~10。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変口音 B音、嬰へ音 Fis音。

7) この小論における「Inventio 13」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) この小論における「Praeambulum 6」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許

## 譜1 「Praeambulum 6」 BWV 784 15~18

## 楽 曲 分 析 (譜2参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部	1~13 (13)	第2部	14~25 (12)
主題の提示	1~6 (5.5)	間 奏	14~17 (4)
主 題	6~13 (5.5)	間 奏	18~21 (4)
		終 止	22~25 (4)

## 各部分における楽曲分析

## 第 1 部

## 主題の提示

- 1~6・1~2 上声部に主題(T)が現われる。(T)は、アルペジオをその要素としており、十六分音符による(a)と、八分音符による(b)で成り立っている。
- 1~2 下声部は、2拍遅れて、上声部の(T)を追いかけている。この2拍遅れることによって、上声部の(a)に対して下声部は(b)、上声部の(b)に対して下声部は(a)という組み合わせになっている。なお、2 下声部の(b)は、上下に動かず、単純に下降するアルペジオに変化している(b)。
  - 3~4 は、a moll<sup>9)</sup>からC durへ転調し、(a)と(b)を使って、自由な展開をしている。
  - 3 上声部は、(a)を細かく上下するアルペジオに変化させた(a)と、(b)を反行させた(q)できている。4 上声部は、3 上声部を2度下に移し、ゼクエンツしている。各小節の最後の八分音符と次小節の最初の十六分音符がタイで結ばれ、シンコペーションとなっている。
  - 3~4 下声部は、1~2 下声部同様、2拍遅れて、上声部を追いかけている。ただし、2度めのゼクエンツは、前半だけである。
  - 5~6 上声部は、(a)と(b)を、それぞれ、1拍に切った(a)と(b)を使い、3~4 同様のゼクエンツを行っている。(a)と(b)を(a)と(b)にすることによって、リズム的

9) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大きい文字は長調、小さい文字は短調を表わす。例、八長調 C dur あるいはC、イ短調 a moll あるいはa:。

凝縮がなされている。また、(b)の最後の音と、(a)の最初の音をタイで結び、細かいシンコペーションにすることによって、緊張感を増している。

- ・ [5]~[6] 下声部は、1拍遅れで、上声部を追いかけることによって、[1]~[4]同様の効果を出している。ただし、下声部においては、タイによるシンコペーションはない。
- ・ [6] 2拍めから3拍めにかけて、両声部とも短いカデンツを置き、主題の提示をC durに終止させている。

#### 主題

- ・ [6]~[13] [6]~[11] は、下声部が先行する形で上声部と下声部を入れ替え、また、C durからe mollに転調する中で、[1]~[4]とほぼ、同様のことをしている。[1]~[4]と異なるところは、4拍分長くなっており、ゼクエンツを3回行っていることである。ただし、上声部の3回めのゼクエンツは、前半のみである。
- ・ [11]~[12] 上声部は、多少、跳躍する音程は違うものの、ほぼ[5]~[6]上声部と同じことをしている。
- ・ [11]~[12] 下声部は、[5]~[6]下声部と異なり、(a)と、(q)を十六分音符の動きにしてリズム的凝縮をした(q)の組み合わせでできている。そのことによって、[5]~[6]以上の、緊迫感を出している。なお、(q)は、十六分音符でできているので、(a)の要素とも考えられないこともないが、(q)が配されているのは、上声部に(a)があるところである。この曲の構成は、常に、上声部と下声部で、(a)と(b)が相対する形になっている。したがって、(q)は、やはり、(b)の要素によるものと判断する。
- ・ [13] 両声部とも、1拍目から3拍めにかけて、カデンツを置き、e mollで、第1部を終了させている。
- ・ [13] 下声部は、終止後、第2部への橋渡しのように、e mollの<sup>10)</sup>のアルペジオを鳴らしている。

#### 第 2 部

第2部は、(a)と(b)に、順次下降する要素(c)を加え、3つの要素で、自由に展開している。(T)が完全な形で出てくるところはない。

#### 間奏

- ・ [14]~[17] [14]~[17] 上声部は、(a)と(a)から成るアルペジオと休符で、1小節を1単位とした音形をなしている。これを2度ずつ下降する形で、ゼクエンツしている。
- ・ [14]~[17] 下声部は、(q)と新しく加わった(c)で1単位とし、これも、2度ずつ下降してゼクエンツしている。
- ・ この間、減七の和音を多用し、e mollから、原調のa mollに戻っている。

#### 間奏

- ・ [18]~[21] [18] 上声部は、(a)と(b)から成る(T)の前半を置いている。
- ・ [18] 下声部は、上声部の(a)と(b)を前後入れ替え、相対している。
- ・ [19]~[21] 上声部は、(a)(a)(c)から成る1小節で、1単位とし、ゼクエンツしている。ただし、そのゼクエンツは、[14]~[17]のような整然としたものではない。音程的には、不規則である。

10) 和音記号の和音の音度は、大きい字体のローマ数字(音度記号)で表わし、和音の形体は、アラビア数字(形体指数)で表わす。例、一度の和音、<sup>7</sup>、属七の和音

- ・ [19] 下声部は、上声部に追従するように、( a ) を2度鳴らしている。常に、( a ) と( b ) を上声部と下声部で相対させているこの曲の、唯一例外の小節である。
- ・ [20] ~ [21] 下声部は、( q )( b )( q )( b ) と( b ) の要素を並べ、上声部に相対している。

終止

- [22] ~ [25] ・ [22] 下声部は、( a ) の反行形 ( v ) と( b ) による変形された ( T ) の前半を置いている。
- ・ [22] 上声部は、( b ) と( a ) を置き、下声部に相対している。
- ・ [23] ~ [25] は、全体で長いカデンツの様を呈している。上声部は、( a ) と( c ) でそれを成し、下声部は、( b ) でそれを形作っている。

### 演奏解釈 (譜3参照)

#### テンポ

テンポに関して、諸校訂版<sup>11)</sup>は、表 のような指示をしている。

表 諸校訂版における「Inventio 13」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bicschoff	Allegro $\text{♩} = 116$
Ferruccio Busoni	Allegro giusto
Alfredo Casella	Allegro tranquillo
S. A. Durand	Allegro
Edwin Fischer	Con moto
Vilém Kurz	Allegro
Gin Enrico Moroni	Allegro tranquillo $\text{♩} = 104$
Bruno Mugellini	Allegro $\text{♩} = 108$
Julius Rötgen	Allegro $\text{♩} = 92$
John Thompson	Allegro

また、内外10人の演奏時間<sup>11)</sup>は、表 のとおりである。

表 諸演奏家における「Inventio 13」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	0 55
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	1 40
Glenn Gould	1963 ~ 64年	ピアノ	0 45
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1 16
András Schiff	1982 ~ 83年	ピアノ	1 18
高橋 悠治	1977 ~ 78年	ピアノ	1 12
田村 宏	不明	ピアノ	0 57
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1 12
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1 17
Helmut Walcha	1961年	チェンバロ	1 28

11) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

演奏家によって、随分、差がある。グールドとエッセンバッハの差は2倍以上である。エッセンバッハは、a mollの情緒性を重んじた穏やかな演奏であり、グールドは、十六分音符の律動性を生かした動きのある演奏である。

筆者は、「Allegro ♩ = 100」というテンポをとる。軽く爽やかに演奏したい。

アーティキュレーション

原則的に十六分音符は *legato*、その他の音符は *ten.* のついた *non legato* とする。区切りを感じるところは ( | ) プレスがほしいところは ( ) で示した。

装飾音

原典には、装飾音はない。筆者は、装飾音を新たに付け加える必要を感じない。

### 各部分における演奏解釈

- 1 ~ 2 ・ *mf* で出る。1 上声(T)は、1 最後のE音に向かって、少し *cresc.* する。このE音を(T)のクラマックスとする。2 上声は、最後のA音に軽く納める。
- ・ 下声は、上声を追いかけ、2 頭のC音に向かって、少し *cresc.* する。
- 3 ~ 4 ・ 1 ~ 2 の(T)より、音量を落とした *mp* とし、少し情緒性を加える。
- ・ タイを意識し、タイのある八分音符は、*ten.* 気味にする。
- 5 ~ 6 ・ 上声は、シンコペーションを充分意識し、律動感を出す。ただし、音量を加えることはせず、6 3拍めのC音に納める。
- ・ 下声は、上声との八分音符と十六分音符の掛け合いを楽しみ、これも、6 3拍めのC音に納める。
- 6 ~ 8 ・ 6 下声の(T)は、*mf* で出る。durであることと、低音であることを意識し、太い音にする。
- ・ 両声とも、ダイナミックは、1 ~ 2 に準じる。ただし、8 3~4拍は、*cresc.* し、9 に持っていく。
- 9 ~ 10 ・ 9 上声最初のC音を、第1部のクライマックスとし、深みのあるアクセントをつける。両声とも、上行する八分音符のアルペジオを、軽く *cresc.* する。
- 11 ~ 13 ・ 5 ~ 6 に準じ、音量を下げ、*mp* にする。上声は、ここも、シンコペーションを充分意識し、律動感を出した上で、13 3拍めのE音に、*dim.* しながら、ほんの少々 *rit.* して納める。
- ・ 下声は、5 ~ 6 と違い、十六分音符のみの動きとなっている。その徐々に下降する動きにつれて、*dim.* し、13 3拍めのE音に、上声同様納める。
  - ・ 13 3~4拍の下声は、*a tempo* して、第2部への橋渡しをする。
- 14 ~ 17 ・ 14 は、第2部の出だしとして、少し強めの *mf* で出る。下声の(c)部分は、上声の動きを受けけるようにする。小節毎に、段階的に *dim.* し、17 には、少し弱めの *mp* にまでもっていく。
- 18 ~ 21 ・ 18 上声から下声へと(T)の断片を *mf* で鳴らし、19 で一気に *cresc.* する。20 ~ 21 は、*dim.* し、*mp* に落ち着く。
- 22 ~ 25 ・ 22 は、*mp* で出る。22 下声の(a)の動きは、長いカデンツへの橋渡しの的にする。22 上声の(a)は、(T)を回顧するように弾き、カデンツへの導入となるようにする。
- ・ 23 は、上声の上昇する動きと、下声の下降する動きにそい、*cresc.* する。
  - ・ 24 は、23 の流れにそって、*cresc.* し、上声3拍めのH音までもっていく。このH音が、この曲の最大のクライマックスである。このH音を少し *ten.* した後、納める方向に向かう。
  - ・ 25 は、両声ともテンポを緩めながら、*dem.* し、それぞれの最終音であるA音に、静かに納める。

## おわりに

「Inventio 13」は、動機の組み合わせが「Inventio 1」と似ている。双方とも、十六分音符と八分音符の対比が美しい。「Inventio 13」には、短調の曲にありがちな情緒性が薄い。その点でも、長調の「Inventio 1」に似た感じを抱かせるのかも知れない。「Inventio 13」は、絶え間ない十六分音符のアルペジオの動きにより、エチュード的要素も強いが、和声の流れの中で、音色感の変化を楽しみたい曲である。

## 参考文献・参考楽譜・参考 CD

## \* 参考文献

市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)

山崎孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

## \* 参考楽譜

Johann Sebastian Bach 「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)

BACH 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)

J. S. BACH 「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, Munchen 1978)

J. S. Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K. G., Wien 1973)

BACH 「INVENTIÖNEN UND SINFONIEN」Urtext (Edition Peters, Berlin 1933)

Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)

Johann Sebastian BACH 「TWO- PART INVENTIONS」Hans Bischoff (Belwin Mills Publishing Corp. N. Y.)

J. S. BACH 「15 INVENTIÖNEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach)

BACH 「TOW- and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)

BACH 「INVENZIONI A DUE VOCI」Alfredo Casella (Editioni Curci, Milano 1982)

J. S. BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S. A. (Editions Musicales, Paris 1957)

J. S. BACH 「ZWEISTIMMIGE INVENTIÖNEN」Edwin Fischer (Wilhelm Hansen, Musik-Forag, Copenhagen 1954)

JOH. SEB. BACH 「15 Zweistimmige Inventionen」Alfred Kreutz (Edition Schott, Mainz 1916)

BACH 「DVOUHLASE INVENCE A TRIHLASE SINFONIE」Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)

BACH 「15 INVENZIONI A 2 VOCL」Gino Enrico Moroni (Carisch S. p. A. Milano 1944)

BACH 「INVENZIONI A DUE VOCL」Bruno Mugellini (G. Ricordi & C., Milano 1983)

JOH. SEB. BACH 「ZWEI- UND DREISTIMMIGE INVENTIÖNEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)

BACH 「THE TWO-PART INVENTIONS」John Thompson (The Willis Music Company, Cincinnati)

長岡敏夫編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」原典版(音楽之友社 1965)

角倉一朗校訂「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」原典版(カワイ出版 1983)

全音楽譜出版社出版部編「バッハ インヴェンション」(全音楽譜出版社)

Hans Bischoff 角倉一朗訳「J. S. バッハ インヴェンションとシンフォニア」(全音楽譜出版社 1972)

Ferruccio Busoni 伊藤義雄訳「二声インヴェンション」(Breitkopf & Hartel, Frankfurt 1914)

井口基成「バッハ集 二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」(春秋社 1983)

千倉八郎編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」(日音楽譜出版社 1983)

## \* 参考 CD

Aldo Ciccolini (Piano) 「J. S. BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)

Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)

Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)

Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)

András Schiff (Piano) 1985 「J. S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村宏 (Piano) 1989 「J. S. バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J. S. BACH INVENTIÖNEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembaro) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembaro) 1961 「J. S. バッハ / 2声部のためのインヴェンション & 3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

## 譜2 「Inventio 13」 BWV 784 [1] ~ [25] (楽曲分析)

## 第1部 主題の提示

1

T

a

a:

3

a'

,q

a'

,q

a: → C:

b

a'

,q

a'

5

a''

b''

a''

b''

a''

K

主題

C:

b''

a''

b''

a''

b''

K

7

T

a

b'

a

b

b

a

C:

9

T

a'

,q

a'

,q

a'

,q

C: → e:

11

a'

b''

a''

b''

a''

b''

a''

b''

a''

K

e:

,q

a''

,q

a''

,q

a''

,q

a''

,q

K

e



第2部 間奏

14

e: → a:

16

e: → a:

間奏

18

20

22 終止

24

## 譜3 「Inventio 13」 BWV 784 ①~②⑤ (演奏解釈)

① Tのクライマックス

*mf*

Tのクライマックス

③

*mp*

⑤

*mf*

⑦ Tのクライマックス

Tのクライマックス

⑨ 第1部最大のクライマックス

⑪

*mp*

ほんの少しテンポをゆるめる *a tempo*

14

*mf* *dim.*

16

*mp*

18

*mf* *cresc.*

20

*dim.*

22

*mp* *cresc.*

24

この曲最大のクライマックス

*f*

少しテンポをゆるめる